

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 高 士華

近代中国における国境意識の形成と日本
—間島問題をめぐる宋教仁と呉禄貞の活動を中心として—

本論文は、「間島問題」をめぐって形作られた清末期中国の国境意識を、日本留学の経験を持つ呉禄貞と宋教仁の活動に焦点を当て、伝統的華夷的辺境意識から国境意識へと変容する様を地政論的に検討した近代中国論である。

現在の中国東北部にあり、朝鮮民主主義人民共和国と境界を接する延辺自治区に大体相当する地域が歴史的には「間島」と呼ばれ、中国・朝鮮・日本の間で「間島問題」といわれる領土・国境問題を生じさせてきた。本論文の第一の特徴は、20世紀初頭における、清国と日本との国境交渉を対象としながら、従来の外交史という枠組みのなかではなく、清国が従来の中華意識に基づく辺境観を、日本との国境交渉の過程で、近代領域国家としての内容に変換させたことを論じており、従来の西洋との関係からではなく、東アジア地域史のなかから、近代国境観を論じようとした点である。

第二の特徴は、呉禄貞と宋教仁という、それぞれは日本陸軍士官学校の清国留学生一期生ならびに日本への亡命・留学の体験を持つ革命派で、ともに日本との間島交渉に当たった二人の人物を取り上げ、彼らの著作ならびに活動から、留学時の国際法を受容を論じた点であり、従来の革命運動家の分析にとどまらない政治外交家としての実績を明らかにしている。第三の特徴は、宋教仁の中国東北地方における足跡を克明に辿る事によって、従来東北地方の辛亥革命期の研究が持つ問題点を、具体的な文献や論点の15項目以上にわたって疑問を呈し、従来の了解の根拠を批判している点である。それによって、これまで全国的に一様な辛亥革命像が描かれてきたことに対して、東北地方が持つ独自の地域的特徴を明らかにした。

上記のように、本論文は、近代中国の境界史研究におけるこれまでの研究史を一新する成果を挙げたものとして極めて高く評価されるが、今後に残された検討課題として、間島問題をめぐって議論された国境意識の形成、日本留学生の国境交渉における役割、辛亥革命期の東北地方の特徴、などの議論が、これまでそれぞれが独立分野として深められてきた研究の全体とどのように関連するのかという点がより検討・整理されなければならないと思われる。しかし、このテーマは、全く新たな資料的・方法的準備のもとに、稿を改めて検討すべきであり、本論文において明らかにされた近代中国における国境意識の形成に関する議論をいささかもそこなうものではないと考える。

本委員会は、上記のような大きな成果をあげていることに鑑み、本論文が博士(文学)の学位に十分に相当するものであると判断する。